

クレチン症の同胞例

—臍帯血TSHと甲状腺抗体—

川 村 正 彦

(名城病院小児科)

研究目的

クレチン症の同胞例の報告は極めて稀である。今回、同胞例を発見、その出生前からの母親の甲状腺抗体、臍帯血TSHの検査が出来、新しい知見を得られた。

研究方法

第1子(2y6M)が無甲状腺クレチン症である母親、その第2子。この他に第1子にクレチン症を持つ妊婦2名。妊娠中の甲状腺抗体と臍帯血TSH。出生した児がクレチン症の有無の検索を行った。

研究結果

クレチン症の同胞例の第1子S. K. は昭和57年7月13日生。生下時体重3,350g。生後10日目TSH 320 u/ml 以上, T_4 0.5 μ g/dl 以下, 無甲状腺性クレチンとして現在治療中。第2子M. K. は昭和59年1月17日生。生下時体重3,110g。臍帯血TSH 255.8 u/ml, T_4 5.0 μ g/dl, T_3 0.75 μ g/ml。生後の甲状腺ホルモンデータは表1に示す通りである。

	TSH	T_4	T_3	T_3 RU	治 療
59.1.21(生後4日目)	104.7	2.4	0.95		
1.24(6日目)	209.4	2.2	0.91	22.0%	← 治療開始5 μ g/kg
1.30(12日目)	211.1	7.9	1.73	23.7	← 10 μ g/kg

表1 クレチン症同胞例の生後甲状腺ホルモン推値

母親の甲状腺抗体の検査(57.6.30)はサイロイドテスト100倍, マイクロゾームテスト100倍と有意の上昇はなし。

次に第1子がクレチン症で第2子は正常であった2症例の母親の甲状腺抗体のデータは、症例1では58.8.5サイロイドテスト6,400倍, マイクロゾームテスト6,400倍と高値、症例2では数回の検査ともサイロイドテスト100倍, マイクロゾームテスト100倍と有意の上昇はなかった。

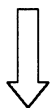
考 按

以上の結果から臍帯血TSHは新生児の重症クレチン症の発見には有用であり、産科側としても容易に採血できるので、疑いのある時は、生後5~7日のガスリー検査に含まれるTSH検査を待つことなく緊急検査として施行するのが望ましい。母親の甲状腺抗体は今回の調査の結果では、新生児のクレチン症の発症とは関係がないと考えられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究目的

クレチン症の同胞例の報告は極めて稀である。今回,同胞例を発見,その出生前からの母親の甲状腺抗体,臍帯血 TSH の検査が出来,新しい知見を得られた。